

《モスクワ・アラカルト35》

## モスクワで終戦記念日に思ったこと

日向寺 康雄

ラジオ「ロシアの声」日本語課チーフアナウンサー

この原稿を15日の日本の終戦記念日に書かせて頂いている。モスクワで今も働き、拙文を掲載して下さる場所がある事に、まず心から感謝したい。これも戦後70年、交流協会の皆さんを初め、数えきれない多くの方々の努力によって、まがりなりにも日口間の平和が保たれてきたおかげだ。

私が働くロシアの日本向け国营ラジオ局は、太平洋戦争における日米開戦に伴い、時の絶対的指導者スターリンの強い意志により、急遽放送開始が決まった。情報戦でソ連が優位に立つたための、最新兵器として登場したわけだ。様々な先端技術は、戦争を機に急速に発展し、実用化が試みられてきたが、ラジオも例外ではない。日本では戦争中、短波放送の聴取は厳しく制限されていたが、それでもごく少数の人達が、モスクワから直接届く情報に耳を傾けていた。

今から10年ほど前、東京のロシア大使館で開いたリスナー集会に、当時放送を聞いて下さっていた大阪の電気商の方が参加され、貴重なお話を伺ったことがある。それによると、当局の指示により放送を「傍受」し、特に独ソ戦の状況について報告していたそうだ。また当時のモスクワ放送には、共産主義思想を世界に広めるという「使命」が課せられていた。あの頃のソ連には、その後それは大きな幻滅に取って代わったが、世界中の平和を愛する人々を惹きつける特別な磁力が確かにあったように思う。そして戦後すぐから冷戦時代まで、日本語放送を中心になって支えた日本人は、軍事捕虜となり入れられた収容所で「民主化」

教育を受け共産主義建設に共鳴し、新しい日本の再生に残りの人生を捧げようと誓った人達だった。

私自身は、ソ連体制末期、ゴルバチョフのペレストロイカ時代に放送局に採用されたので、そうした世代の方々が、複雑な思いや挫折感、言い換えればソ連に裏切られたという思い、そして当然ながら強い望郷の念を胸に秘めながら働いている姿を間近に見る事が出来た最後の世代に属する。皆、御自分達の過酷な体験をもとに、決して戦争を再び起こしてはならないという固い信念のもと、鉄のカーテンが降ろされた向こう側で、日本人としての誇りを失わず、誠実に働いておられた。先輩方は、ソ連社会主義体制の単なる政治的宣伝放送の枠を超えて、戦後しばらく抑留者の方々の安否を故郷に伝える番組を準備したし、放送の中でできるだけソ連・ロシアの一般の人々の考え方や生活感を伝え、豊かな文化や芸術、音楽を紹介し、日口両国民の相互理解の小さな架け橋になりたいと願っておられた。そこには、戦争によって強引に運命を変えられ、戦後の国際情勢に翻弄されながら、黙って自分達の重い運命を引き受けた先輩達の強い祈りがあった。

モスクワからのラジオ放送は、インターネットになった今も、自分達の立場を一方的に伝え、敵と味方や争いの原因を創り出し、敵を攻撃する単なる政治宣伝手段ではなく、人間の声による人間の平和な未来のための放送でなくてはならない。70回目の終戦の日、私はあらためて先輩たちの願いを肝に銘じた。